

おっちゃん

好枝

おっちゃん

平栗 好枝

戦前、戦後を通しての事だから古い話だ。

私が疎開した先は茨城県の利根川ぞいの小さな町だった。そこに紺屋をやっていた親戚があった。「大黒屋」という。

京都の町屋のような造りで、真ん中に通路があり、右側は部屋が続き、片方には藍の入った瓶がいくつも並んでいた。その先の広い洗い場で濯いだ反物は、奥行き深い庭に干すのだった。

私達子供は、その反物の下を潜っては遊び、竈の火加減を見ている叔父によく叱られた。

叔父というより、私にはおじいさんのような風采に映っていた。勿論歳など分かるはずもないし、とにかく遊びに夢中だったから、顔さえまともに見たこともなかった。

大きな竈には、いつも大きなお釜がのっていた。染め物に使う染料を煮ているのか、布を染めているのか、竹で出来た火吹き竹を持ち、背中を丸め、いつも竈の前の小さな椅子に座り、火の加減をジッと見つめていた。光線の加減などにより、その姿は余計に老人に見え、子供心にも奇異な印象だった。

名前は知らない。皆は「おっちゃん、」と呼んでいた。

その人は、私の母の姉「お竜さん」の夫だった人である。

「おっちゃんは、お竜さんに惚れぬいていたからね」

母をはじめ、人々が集まるとそんな噂話しているのを、私も度々聞いたが、「惚れる」などと言う言葉の意味など、当時の私に分かるわけがない。理解できたのはずっと後になってからだ。

お竜さんは、終戦の少し前に「食道ガン」

で他界した。体を震わせながら、ソーメンを食べていたのを垣間見たことがあった。器量がよく、大分昔のことだからおこそ頭巾などを被って出ると、人が振り向いたそうだ。

「同じ姉妹なのに、姉は本当にきれいだったからね」

母は健康そうな感じだったが、私の淡い記憶でも確かに、お竜さんは色白で背の高い、きれいな人だったように思う。

惚れ抜いた妻に先立たれた、おっちゃんの悲しみがどんなものだったのか……。言葉では言い表すこともできず、仕事である竈の火を見つめつづけることで、どうしようもない辛さと、孤独に耐えていたのかも知れない。

おっちゃんには、私にとっては従兄弟達となる子供が何人か居たと思うのだが、当時母が言っていたのは、「依怙地になり、その寂しさの心の内は見せなかった」ということだ。

一昨年、夫と死別した友人は、今でも話すたび涙を浮かべる。子供がいないので心細さは尚更のようだ。その悲しみと寂しさは深く未だ癒されない気持ちを持って余し、どうにもならないことが分かっている、どうにもならないらしい。

近頃、私自身も、自分の隣に孤独の影が忍び寄ってきているような気がする。若い時には、周囲の煩雑さから孤を楽しみたくて、

「あーあ、一人になりたい」

などと粹がって、叶わない苛立ちに焦れたりしたものだが、そんな甘ったれたものとは違う、経験したことのない妙な力で、心の隙間に入り込もうとする。どうやらそれは人が歳を重ねるにつれ、離れることなく、人生の最後まで付きまってくるものようだ。

今年のお正月、久し振りにおっちゃんの方の親戚の人から、年賀ハガキが届いた。

「懐かしいなあ」

そう思うと、あの頃が、脳裏をよぎった。

そのハガキの向こうに、竈の前に座り、誰にも分かってもらえない寂寥感に一人耐えていた、遠い日のおっちゃんの姿が浮かんだ。

(平成二十一年二月 課題「孤独」)